『色里三所世帯』と京都・大坂・江戸

――西鶴と貞享期の読者の三都意識をめぐって――

森田雅也

一、はじめに

『色里三所世帯』（貞享五・一六八八年六月刊）は、従来より、西鶴存疑作として、取り沙汰されてきたが、貞享期（ここでは、後述する一六八四～一六八八年の西鶴多作期をさす）の読者と作家の関係から、京都、大坂、江戸の三都意識を分析するには、面白い作品と言える。

本書は、京都、大坂、江戸の三都を舞台に好色遍歴を展開しながら、主人公外右衛門が江戸で好色の果ての悶死をとげるという構成に仕立て上げられている。

主人公外右衛門はなぜ、「江戸」で死ななければならなかったのであろうか。

一方、同年刊行の『日本永代蔵』の最終章では、「人のすみかも三ヶの津に極まれり」としながらも、理想とすべき商人の姿としてかかげる三夫婦世帯は、「京都」に住んでいる。なぜ、商人の町、「大坂」ではないのか。

右の矛盾に対する素朴な疑問は、単に『色里三所世帯』が西鶴作か否かという問題にとどまらず、作家西鶴と貞享

期の読者との関係から考えるべきものではなかろうか。

そこで、本論考では、『色里三所世帯』を視座として、西鶴の貞享期作品をとりあげ、西鶴と読者の関係を三都意識から解明しようと以下考察するものである。

二、貞享期の西鶴作品

さて、『色里三所世帯』の分析に入る前に、貞享期の西鶴作品について考えたい。

衆知のごとく、西鶴の散文学におけるデビューは天和二年の『好色一代男』である。しかし、翌々年の天和四（一六八四）年の二月には貞享に改元されている。その年に西鶴の『諸艶大鑑』すなわち、『好色二代男』が刊行されているのである。以降の西鶴は、

貞享二年…『西鶴諸国はなし』、『椀久一世の物語』、浄瑠璃では『暦』『凱陣八島』。

貞享三年…『好色五人女』、『好色一代女』、『本朝二十不孝』。

貞享四年…『男色大鑑』、『懐硯』、『武道伝来記』。

貞享五年…『日本永代蔵』、『武家義理物語』、『嵐は無常物語』、『好色盛衰記』、（一六八八年）『新可笑記』、及び『色里三所世帯』。

と刊行されているのである。

浮世草子というジャンルに絞れば、西鶴はこの貞享期に、実にその作品数の五割を刊行していることとなる。すなわち、貞享期はいわゆる、作家西鶴としての多作期であり、円熟期にあたるといえるのである。

それゆえにその並はずれた制作スピードに疑念がおこり、西鶴代作者説、共同執筆という方法から西鶴工房説が生まれたことは、これも衆知なことである。

その点について、谷脇理史氏は、とくに貞享三年の西鶴について、

貞享三年の後半期に西鶴は、なぜ突然のようにこれ程多量の作品を書いたのか、又、書けたのか――この問題に答えることは比較的簡単であろう。（中略）西鶴の立場から見れば、俳諧や浄瑠璃に対する情熱を失っている反面、『一代男』以後の小説が好評を博しているのが、貞享三年の時点であるから、小説執筆に最も情熱をそそげる主体的な条件は十分に整っていたわけであり、それがこの時期の西鶴が意欲的に創作を行おうとする第一の理由となっていることは確かである。と同時に、『一代男』刊行後すでに四年、もはや浮世草子界の第一人者、ある西鶴に、売れる作品の執筆を依頼する書肆の要請も又、西鶴の書く意欲を刺激したであろうことは、十分推測出来る所でもある。

との見解を示されている(1)。この時期にこそ、西鶴の円熟味があるのであり、作家と読者との関係ももっとも有効に機能した時期ではないかと考えるのは同感であるが、ここではそれを作家西鶴の活躍した、貞享五年までの貞享期として考えたい。

また、京都、大坂、江戸の三都という観点からは、この時期の西鶴作品に書肆の要請があったのではないかということも注目できる。西鶴作品が大坂版から、江戸と大坂版に、そしていわゆる三都版に移行しているからである。

貞享二年…『諸艶大鑑』（大坂）『西鶴諸国はなし』、（大坂）『椀久一世の物語』（大坂）。
貞享三年…『好色五人女』（江戸・大坂）、『好色一代女』（大坂）、『本朝二十不孝』（江戸・大坂）。
貞享四年…『男色大鑑』（大坂・京都）、『懐硯』（刊記なし）、『武道伝来記』（江戸・大坂）。
貞享五年…『日本永代蔵』（京都・江戸・大坂）、『武家義理物語』（京都・江戸・大坂）、『嵐は無常物語』（版元）、『色里三所世帯』（大坂）『好色盛衰記』（江戸・大坂）、『新可笑記』（江戸・大坂）。

すなわち、事象面からだけでも、西鶴と書肆が意図的に上方を脱して、読者を江戸にも求めようとした行為のあら

われと見ることが出来るからである。

三、三都と色里評判記

さて、そのように西鶴の貞享期において、三都と読者の関係が重要視できる中で成立した、『色里三所世帯』は面白い存在といえよう。

ここで『色里三所世帯』であげる「三所」すなわち、「三都」についても考察する必要があろう。三所とは江戸時代通じての三大都市、京都・大坂・江戸であるが、当時の西鶴の読者にとっては、京都の島原・大坂の新町・江戸の吉原という三都の遊里を狭義にさしているという期待がある。特に「色里」とある以上、当然である。

当時、三都の遊里比べが、浮世草子の読者たちの耳目をひく話題であったことは、容易に想像できる。

・京の女郎に、江戸の張を、もたせ、大坂の揚屋で、あはば、此上、何か有るべし。（『好色一代男』巻六の六）

・目前の喜見城とは、よし原・島原・新町、此三箇の津にます、女色のあるべきや。（『諸艶大鑑』巻一の一）

・さればさる人、長崎の寝道具にて、京の上薦に、江戸のはりをもたせ、大坂の九軒町にて遊びたしと、ねがひしとかや（『難波鑑』巻二　延宝八年）

このように三都の遊里は無造作にその特性があげられ、読者を納得させるのであるが、その根拠はどこにあるのであろうか。

データ主義から言えば、粋人たちが実際に三都の遊里体験を行い、その共通認識から得た結論と言えるであろうが、果たしてそのような経験が可能であったであろうか。

なるほど、『好色一代男』の世之介や『色里三所世帯』の外右衛門は、右を可能にした実践派である。しかしそれ

は、莫大な財産を持って初めて可能になる、つまり、非現実的な夢物語なのである。もっともそれがゆえに、読者が歓迎したとも言えるのではなかろうか。

仮に経済的な問題をクリアすることがあっても、せっかく馴染みの大尽客となりながら、三都の遊里制覇のために、また新しい遊里におもむき、一から出直すということは、大尽の在所や馴染みの太夫との関係などを考えれば、常識的にはあり得ない体験であったといえよう。それは、かの『色道大鏡』の藤本箕山をしてもなかったと言うべきではなかろうか。つまりは全否定すべき仮定といえよう。

そうなると、架空世界と言うことになるわけで、読者たちも他から情報を得ざるを得ないということになる。

その場合、一番に思い当たるのは『遊女評判記』である。しかしそれとて、いざ一書にある三都の遊女の比較となるとそうは言えなくなる。

そこで、本論考末に付した「遊女評判記と三都の関係」の表をご参照いただきたい。これはそこにも注を付したが、野間光辰氏『初期浮世草子年表』所収『近世遊女評判記年表』および西山松之助氏『遊女』より私が作成したものである。

『遊女評判記』そのものは、寛永十八年以前からあったが、今回、三都としたため、三都のいわゆる三大遊里の成立年次を加えた。特に大坂新町は諸説あり、※とした。寛文十二年以前に大坂が散見できるのもそのためである。

その付表によれば、京都島原、江戸新吉原、大坂新町の『遊女評判記』が出揃っても、三都を比較した『遊女評判記』が貞享年間までに出版されていないのがわかる。

延宝六年に『色道大鏡』の名をあげているが、本書を「諸国」と分類したように、巻十二、十三「遊廓図」に、他の遊廓とともに三都の遊里があげられているだけである。つまり、取り立てて、三都の遊里の比較を目的としていな

い作品といえるであろう。

天和二年『恋慕水鏡』をあげるが、野間光辰氏が『近世遊女評判記年表』に入れられていることに従ったものであるが、山の八の浮世草子とも仮名草子ともいえる作品である。巻一の諸分秘伝書に続く、巻二、巻三が三都の遊女をあげるもので、このような取り上げ方であれば、まだしも同年刊行の『好色一代男』の方が三都の比較意識があるといえよう。

その後は、『諸国色里案内』までない。野間光辰氏の『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に書かれた解題によれば、『諸国色里案内』は全二冊。空色軒一夢序。貞享五年正月、京都吉田六兵衛・いせ屋市郎兵衛刊。元禄五年、同九年の『書籍目録』には、「色里案内者」または「色里案内」として、三冊と注することから、下巻に絵図があって完本は三冊の可能性がある。日本全国四十三か所の遊廓・茶屋等についてその縁起・沿革を記し、特に京都島原・大坂新町の廓については、女郎名寄せ、揚屋・茶屋家名、揚銭等をも挙げている。しかし、江戸吉原については「先輩の書」に詳しければとて、揚屋・女郎屋の数を記さない。

この書は『色里三所世帯』と同年の正月に刊行されている。『色里三所世帯』が六月刊行であるから、版行を急いだものであれば、ぎりぎり、この『諸国色里案内』の影響を受けた可能性はあるといえよう。

また、偶然の一致という可能性もある。実際、西村市郎右衛門未達の『好色三代男』が、その一ヶ月後刊行の西鶴の『好色五人女』の女性たちに多くふれていることなどからも、当時の時代感覚が求めるものに聡い作者であれば、異なる作者であっても、同一の着眼点を持って、作品化する可能性はあったと考える。

さらに二書には「色里」というネーミング、三部（？）仕立て、都島原から始まるなどの共通項もある。

しかし、自家撞着ながら、この『諸国色里案内』が三冊仕立てであったという可能性については、疑問を持つ。

それは素朴な疑問からで、『諸国色里案内』の諸本いずれもが、二冊めに刊記を持つからである。

『諸国色里案内』に関する、長谷川強氏の翻刻解題[2]によれば、絵図が、下巻であったとされている。長谷川氏は、東北大本を底本とされている。もう一種の翻刻は『未刊文芸資料』に朝倉治彦氏によって載せられ、解題は中村幸彦氏が担当されている。底本は忍頂寺本である。その解題で、中村氏は元禄五年刊『広益書籍目録大全』に「三色里案内者」とあることから、これが三冊めにあたるとされ、三冊めに絵図の存在の可能性を本文との整合性から指摘されている。長谷川氏もこの説を承けられての解題である。

前述の野間氏もその説をとっておられるので従いたい。ただ管見を加えれば、調査した京都大学文学部頴原文庫本は、父君謙三氏による書写本であるが、内題に「並び因縁揚屋しはらひ付」とある。二冊本の本文に揚屋の料金が散見できることから、さらに付録としてこれを書留めたものが三冊めの「因縁揚屋しはらひ」ではないかと推論する。必ずしも絵図である必要はないかと考えるが、これにはさらなる調査を課題としたい。

さて、その『諸国色里案内』をしても、諸国の色里紹介であり、三都は書かれているものの、三都にしぼったものではない。それどころか、後年、柳亭種彦をして、江戸の記述に間違い多しと指摘された書でもある。

さすれば、三都の色里に絞り、そこを舞台にした作品は『色里三所世帯』が嚆矢といえるかも知れないのである。

四、『色里三所世帯』と三都

ここでやっと、『色里三所世帯』とは、どのような作品かについて考えてみたい。書誌的なことや梗概については、以下富士昭雄氏の「解題」をあげる。

本書は大本三巻四冊、各巻五章（五話）、全十五章から成る短編小説集である。貞享五（一六八八）年六月に刊行された。

版元は原本に記されていないが、元禄九（一六九六）年の『増益書籍目録大全』等から大坂の書肆、雁金屋庄兵衛と判明する。（中略）本書は、京の東山岡崎に二十四歳で若隠居した浮世の外右衛門が、金のあるのにまかせて女色道に打ち込み、京・大坂・江戸の三都で、様々な途方もない遊興をし尽くすことを描いている。作品の構成は、右の三都（三所）の話を上・中・下の三巻として、また各巻は五章（五話）ずつから成る。下巻は第一・二章の二話と第三・四・五章の三話とをそれぞれ分冊して、計四冊とする。

本書の内容は、他の西鶴作品に比べてわい雑・低俗な節があるとして、以前西鶴作品を疑う説も出たが、現在は岸得蔵等による、文体・筆致・連想などに関する精細的確な研究から、西鶴作と認められている[13]。

右にみるように、作品の趣向は、主人公外右衛門が京都、大坂、江戸と好色遍歴して江戸で好色の果ての悶死をとげるというものである。その点では、『浮世栄花一代男』とともに、『好色一代男』を追随した作品といえるかも知れない。

もっとも、『好色一代男』や『諸艶大鑑』、『好色盛衰記』には、多くの三都の遊女が登場するものの、諸国咄形式をとっており、三都の遊里だけを論じたものではない。

貞享五年の『色里三所世帯』こそ三都を正面から扱った作品なのである。

粗々ながら、以下に『色里三所世帯』の筋と、三都にかかわる言葉を抜き出してみた。

【京都】

・浮世の外右衛門（二十四歳）

・京都の東山岡崎に住む若隠居で生まれながらの金持ち。

・「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」、楽しみは酒淫美食。

・二十四人の妾女と戯れるが、やがて、跡継ぎ産みたさの騒動に発展し、素人女に辟易とし、島原の遊女狂い

（「太夫天職かりそめにも十四、五人の一座」）をし、東山大尽と呼ばれる。末社遊びの豪遊もする。
・島原の太夫を千五百両で身請けして、所帯を持つ。

【大坂】

・新町の遊女狂いと末社遊び。
・四つ橋での太鼓もちたちとの男世帯。
・「京より薪やすし。米自由にして、酒からく、延紙は吉野より手廻しよく、伽羅は堺より取よせ、南請にふんどしの干場もよし」（中ノ二）
・未婚娘の後家仕立て遊び。
・木津川での屋形船遊び。
・住吉社に向かう途次での色女との出会い。
・「大坂に世帯持といふは、太鞍を名代にして、内証は我ままにしてのたのしみ、又うへももなき願ひ。……其身は新町を家にして」（中ノ五）
・「女郎と名の付たるをひとりも残さず、毎日壱人づつ揚げ」たうえに素人女とも遊ぶ。
・美女ばかり「遊女にて四人素人女に十一人」と所帯を持つ。

【江戸】

・太鼓持ちたちと逢坂の関をこえて、東海道を江戸へと下る。
・浅草の今全盛の太鼓もち、源次のところに身を寄せる。
・元吉原の裏店でを借りて、太鼓持ちたちと男世帯をする。

・吉原で太夫全員集めた上での三十日買い切りの大尽遊び。
・太夫小紫を三千五百両で身請けするが、太夫勤めは続ける。
・上方から連れてきた太鼓持ち十一名とともに女嫌いとなりぶらぶら病となる。
・小塚原での草庵暮らし。
・「人間一代を十五さいより六十三までにつもり、さかん四十五年が間、昼夜の女遊を勘定せば、いづれも大分算用残り有べし。」（下ノ五）
・外右衛門は極楽往生を願ったが、夢に太夫、幻に後家が立ち、現に京の妾どもがあらわれ、後ろからは大坂でだました娘がとりつき、前からは置き去りにした女房がとりつくので、気力が衰え、最期は太鼓持ち共々、女の執心に呵まれ、悶死した。

【三都】

・「京と武蔵と難波に、民の竈の三所所帯をかまへ」（上ノ一）
・「外右衛門はそなはりし福者、三万三千両の光り、是を三つに分て、京、大坂、江戸にて皆にする覚悟」（上ノ五）
・「いづれも鯛は、京も大坂も江戸も、人皆是をほめけり。」（下ノ三）
・「外右衛門は今の世の大臣、その子細は、諸分は京の嶋原に身をなし、口舌は大坂の新町に魂をくだき、はりつよき所を江戸のよしはらに見初」（下ノ三）
・「三个の津の女好み、さまさまの罪をつくらせ、其報ひ眼前に身をせめ、男ざかりの我々、東の土と果ん事、残念なる顔つきすれば」（下ノ五）

これを見る限り、結論を急ぐようながら、『色里三所世帯』は、単に京都島原、大坂新町、江戸吉原の三大遊廓をわたり歩いただけではなく、その遊廓周辺に「世帯」を構えたところに特徴があるのがわかる。まさに「三所世帯」なのである。

それも『好色一代男』のように、寄寓するのではなく、その地で世帯を持っている。

京都では、東山岡崎の隠居屋で二十四人の妾と生活し、皆で女相撲を催したり、水風呂に入るなどの毎日を送る。やがて、そのうちの一人が懐妊するとともに、十七人が懐妊し、全員が男子をもうける。それで、この生活にピリオドを打ち、島原へと繰り出す。

島原では、太夫、天神とりまぜて十四、五人の一座での豪遊をし、東山大尽と呼ばれるが、一人の太夫を千五百両で身請けし、世話女房にしている。

大坂では、新町の住吉屋、扇屋での遊びのあと、四つ橋に借り座敷をして、大勢の太鼓持ちたちと共同生活を送る。それも豪遊というより、この地を選んだのは、まさしく所帯っぽく、「京より薪やすし。米自由」という理由からなのである。

さらに、そこに多数の後家を呼び、遊んでからは、後家にはまり、娘を後家の装束にしての後家遊び、この遊びは、娘十二人に一人につき、前金で十両まで支払って、年季契約までも結んでいる。

三軒家での舟遊び、住吉の松原での戯れも四つ橋を生活基点としていると推察できる。

もっとも、外右衛門としては、「大坂に世帯持といふは、太鼓を名代にして」であり、「其身は新町を家にして」、新町での遊びに励んでいる。それも太夫、天神から鹿恋にまで及ぶ、廓の女たちすべてを相手としたものである。その後は素人女を毎日取り替え、三年過ごしている。

大坂では、選りすぐりの美女である遊女四人、素人女十一人を裏座敷に囲いながら、皆捨てて、太鼓もちたちと江戸へと下ってしまう。

江戸では、まず、浅草の有名な太鼓もちのところに身を寄せる。その後、元吉原の裏店を借りて、男世帯を始める。水道の水も飲みなれた頃、吉原に行き、ここでも、太夫全員を集めた上での三十日買い切りの大尽遊び。外右衛門一行は吉原に住むようになる。

そこでは、太夫小紫を三千五百両で身請けするが、太夫勤めはそのままで客は外右衛門一人という贅沢。太夫との生活は続くが、貯えは後一年ほどの金となってしまう。

そうこうする中、外右衛門は、太鼓持ちともども女嫌いとなり、ぶらぶら病となり、吉原に近い小塚原に庵を結び、皆、今までに棄ててきた女たちの幻に呵まれながら、一人残らず、枕を並べて死んでいくというものである。

このように話の筋を追えば、外右衛門の人物形象は、京都・大坂・江戸と好色遍歴を重ねた往生ながら、『好色一代男』のように永遠の性の謳歌と言うような前向きなものではなく、大尽遊びのあげくに零落し、死んでいった悲しい遊蕩児の末路と読めてくる。

また、この間に二十四歳の青年は、確実に年を重ねている。京都で、大坂で、江戸で世帯を持って、どのくらいの月日が経ったかは如何様にでも解釈できる。豪遊はするものの、世帯そのものは質素であることから、三万三千両を使い切るには相当の月日を擁したことが見て取れるのである。

「十五さいより六十三までにつもり」のような吐露を外右衛門にさせているのも、外右衛門が六十三歳を越えて、すでに男性としての肉体的な衰えの中にあることを示唆しているのかも知れない。

六十歳を越えて、性の限界をつくづくと感じて死んでいく哀れな外右衛門。

その意味では、『好色一代男』の六十歳を越えた世之介が掲げた性への挑戦に対する反措定的な人物と言えるかも知れないのである。

五、三都からみる『色里三所世帯』と『諸艶大鑑』

それでは、『色里三所世帯』は、『好色一代男』の世界に一番近いかと言えば、そうとは言えないであろう。世之介と違い、外右衛門の場合は、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」と言う女色一本の好色男とされているからである。その意味では、外右衛門の同系は、『諸艶大鑑』の世伝とするべきであるからである。

世之介の息子世伝は、諸国を好色遍歴し、三十三歳で大往生を遂げる。その世伝の臨終には、先だった太夫たちが菩薩の姿で来迎するというものであった。それに対し、『色里三所世帯』は今までに棄ててきた女たちの幻に呵まれながら死んでいく。色道の成功者として成仏する世伝に対し、色道の敗残者として地獄に堕ちていくようなこの外右衛門の設定は『諸艶大鑑』を意識して創作されたことを示しているのではなかろうか。

『諸艶大鑑』最終章、巻八の五には、

「二十よりうちのさはぎは、此道に入、皆足代」と、分知り和尚も、ときたまへり。それより十年、大興に入て、太夫の有がたひ所を賞、四十より内に、留る事をさとらずば、揚げ銭の淵に沈む事、まのまへ也。

という警鐘がある。外右衛門の死をなぞらえれば、まさにこの警鐘を無視したところにあると言えるのである。

加えて、『諸艶大鑑』冒頭、巻一の一には、

目前の喜見城とは、よし原・島原・新町、此三箇の津にます、女色のあるべきや。

という三都の色里世界を形象化しようとする作品化の意図が窺われる。これもまた、『色里三所世帯』創作時に『諸

艶大鑑』を意識した可能性はとても高くなるのではなかろうか。

そう考えれば、『色里三所世帯』上ノ二で「女護が嶋」の語が、

爰もさながら女護の嶋、男のすがたは見ず共、せめてや其袖風もなつかしと……

とあるのも、『諸艶大鑑』との関係で考えることが可能となってくる。

ところが、その関係を明らかにしたことによって不明な点があらわれてくる。『諸艶大鑑』の終焉が「大坂」であるのに対して、なぜ、『色里三所世帯』は「江戸」かという問題である。その点について、以下「京都」も含めて三都意識から考察をすすめたい。

『色里三所世帯』の場合、上ノ一には、

我ままなる遊楽、王城の思ひ出には、誰とがむる事なく、又上もなき奢ぞかし。（波線は森田。以下同じ。）

と、「京都」には大名がいない「王城」の地であるために、自由気ままな贅沢な遊興生活ができるとしている。

また、「大坂」の地については、中ノ三に

爰も天下の町人なればこそ、世間を恐れず、思ひ思ひの色さはき、遠国にてなるべき事か。

と、天下の町人の町で、将軍様のいる「江戸」より遠く離れているために、好き放題な遊興ができるとしているのである。

これは、明らかに天和三年以来頻繁に出された「奢侈禁令」を意識しての二都の位置づけではなかろうか。

実際、外右衛門は「京都」では東山で、「大坂」では三軒家で豪快な遊興をするが、それが「江戸」においては、吉原の廓の中に限っている。

そのように考えれば、外右衛門にとって、「江戸」は閉塞の地であったのかも知れない。

『色里三所世帯』は、版元が「大坂」の雁金屋であるとされている。三都版が主流になりつつある時代に、あえて、ローカルな読者を対象として作品を形成したとすれば、「江戸」で悶死するのも納得できる終焉である。

あるいは、「江戸」は単に政治都市であるという閉塞感だけでなく、巨大都市ゆえの恐怖に似た居心地悪さがあるのかも知れない。下ノ一で

江戸は女のすくなき所を今覚て、尤この数百万人の男に、其相手はたらぬはづなり。

と人の多さに圧倒される当時の人々の驚きは、『日本永代蔵』で江戸日本橋南詰を描いて、

流石諸国の人の集り、山も更にうごくがごとく、京の祇園会、大坂の天満にかはらず（巻三の一）

とする心境と一致したものと考えられないであろうか。

ただ、色里については、「江戸」の吉原の記述の方が「京都」の島原、「大坂」の新町より具体的で、太夫小紫など延宝期を代表する太夫たちの名前が連なっている。

これは、遊廓の事実を伝えるべき、先日の『諸国色里案内』が島原、新町の詳細を伝えながら、こと吉原のことになると「先輩の書」に譲るとして、吉原の記述が圧倒的に少なくなることと相対的にとらえるべき事象と考える。

『諸国色里案内』の場合、「京都」の版元と考えられるので、読者も京、大坂の人を多く想定し、作者が書く島原、新町については間違いのないものでなくてはいけない。さりとて、「江戸」も間違いなくそのレベルで書くべきなのであるが、資料が足らない。そこで、このような逃げ方をしたとも考えられるのである。

一方、『色里三所世帯』は、そのような事実を伝える必要性はなく、フィクションとして読者の期待を満足させればいいので、読者に知り尽くされた島原、新町より、馴染みの薄い江戸吉原の方がフィクション化しやすかったといえるのである。

そのように考えれば、『色里三所世帯』が色里物語として読者の期待を最後まで引きつけるには、江戸を最終巻としなければならなかったといえるのである。

さて、それでは先述の『諸艶大鑑』の場合はどうであろうか。

版元は「大坂呉服町心斎橋、池田屋三郎右衛門」の単独版である。『色里三所世帯』の場合と同様に考えれば、読者の想定は大坂中心と考えられる。だからといって、主人公世伝が昇天するのは「大坂」の地であると推論すれば、それはあまりに短絡的であるかも知れない。

『諸艶大鑑』が刊行される一ヶ月前には『好色一代男』の江戸版が刊行されている。『好色二代男』と角書きした『諸艶大鑑』が、このような『好色一代男』の続刊を楽しみにしている全国の読者の求めに乗じていたことも確かである。

また、『諸艶大鑑』が随所で遊女評判記の方法を意識して、その上に形成されたことは、有働裕氏の一連のご論考[4]が示すとおりである。

かかる事情を鑑みれば、先に示した冒頭部分で企図した三都の遊里物語をさらに広げて、全国の読者のために新しい諸国遊里物語を創作しようとしたと考えてよかろう。

そうなると、その諸国遊里物語の中で、よりによって、「大坂」の地に戻って昇天するという行為は注目すべきであろう。

そこで、思い浮かぶのは『西鶴諸国ばなし』の最終章「銀が落としてある」である。

この話の眼目は、大坂から江戸へと下り、江戸で一生生活できる程の富を儲けて戻ってきて楽に暮らす商人に、大坂で食い詰めた馬鹿がつくほどの正直者が、江戸で成功する商売を伝授してもらうところにある。商人はこの正直者

に江戸で銀を拾う商売がいいと勧めたところ、本気で信じ、結局商人たちの陰ながらの助力も得て成功するという話である。

ここで考えるべきは、この成功した商人像である。大坂の商人がうらやましく思う、理想の商人像は、「大坂」から「江戸」に棚を出して、一生分の大儲けをして再び「大坂」に戻り、楽隠居するという姿なのである。『諸艶大鑑』の世伝も「女色の道」で成功して帰ってきたわけである。生まれは京都ながら、「江戸」で成功して再び「大坂」に帰るという大坂商人の王道を重ね合わせたとは考えられないであろうか。

ただそうすると、やはり『諸艶大鑑』が大坂中心の読者を狙った可能性は否めないことになる。ただし、その場合は、三都版という機構が出来る前である。『色里三所世帯』は三都版以降であるにもかかわらず、大坂版なのである。

もっとも『色里三所世帯』の作者の思いとは別に、書肆の思惑だけから、三都版となり、再編改題した『好色兵揃』の版行につながったと考えるのである。

六、西鶴と三都

しかし、二つの作品の終焉の地は、西鶴の三都意識の問題として重要な問題である。

『日本永代蔵』（貞享五年）の場合、あれだけ多くの商人像を描きながら、商人の町「大坂」ではなく、「京都」の三夫婦世帯で終わっている。

しかし、意外なことに『日本永代蔵』を読めば、諸国商人咄となっていることがわかる。そして、断片的に大坂の商人や商売が出てくることはあっても、正面から闊達な商都「大坂」を描いたものは、存外少なく、巻一の三「浪風

静に神通丸」のみと言ってもよいかも知れない。

それに対して、「京都」の商人を扱った話は、巻一の二「二代目に破る扇の風」から始まり、巻二の一「世界の借屋大将」、巻四の一「祈るしるしの神の折敷」、これに淀、伏見、山城の話を加えれば、大坂を圧倒している。

さらに「江戸」となると、巻一の一「初午は乗てくる仕合」に続き、巻一の四「昔は掛算今は当座銀」の三井八郎右衛門高平、巻三の一「煎じやう常とはかはる問薬」、巻四の三「仕合の種を蒔銭」、巻六の二「見立て養子が利発」など「京都」を凌ぐ数である。

あげくは巻二の三「才覚を笠に着る大黒」のように京を下って、江戸成功した商人まで描いているのである。

この事象を『色里三所世帯』の視座から見れば、三都版ゆえの江戸、京都への配慮といえるのではなかろうか。

それが、北御堂の書肆森田庄太郎の意志なのか、西鶴が読者に与えたサービスかは不明であるが、少なくとも読者の三都意識に応じた可能性は考えられるであろう。

巻一の二は「京都」、巻一の三は「大坂」、巻一の四は「江戸」である。三都の均衡意識はここからも窺えると言えよう。

巻一の一では、「江戸」の俄分限の商人を「万歳楽」で飾っているが、そうした以上、最終話は「京都」の商人への賞賛で終わらなければ、「大坂」商人としての西鶴の立場がない。そのような謙抑の心からの終章ではないかと推し量る次第である。

蛇足ながら。右の論を用いれば、三都版『世間胸算用』の最終章が、大晦日の掛乞いとは関係ない、「長久の江戸棚」で終わっていることも理解できるのではなかろうか。

以上のように分析したが、三都版に受容者側の読者、作家の意識を求めたが、三都版が単なる出版流通機構の変容

にすぎないという見解もあるであろう。そして、『色里三所世帯』の作家意識とした場合、それが西鶴であるかどうかという問題。三都が「京都」「大坂」「江戸」という順番になっていることなど課題は山積されている。この論考を『色里三所世帯』を視座として、貞享期の読者の三都意識を探る、一つの足がかりとしたものとしてご理解いただくことをお願いして結びとしたい。

注

(1) 「貞享三年の西鶴」『西鶴研究序説』（新典社）一九八一年刊。

(2) 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成　第九巻』（三一書房）一九七四年刊。

(3) 『新編　西鶴全集第三巻』（勉誠出版）二〇〇三年刊「解題」による。

(4) 『西鶴はなしの想像力』（翰林書房）一九九八年刊。

テキストには『定本　西鶴全集』（中央公論社）及び『対訳西鶴全集』（明治書院）を用い、旧字、句読点等適宜改訂した。

付記　本稿は、日本文学協会第二十三回研究発表大会（二〇〇三・七・六、於龍谷大学）において口頭発表した「西鶴と京都・大坂・江戸～貞享期の三都意識をめぐって～」を改稿したものである。会場では多数の方々から様々なご指摘をいただいた。心より感謝申し上げる。

（もりた　まさや・関西学院大学文学部教授）

【付表】遊女評判記と三都の関係
〔野間光辰氏著『近世遊女評判記表』（青裳堂書店）および西山松之助氏編『遊女』（東京堂出版）より〕

寛永十八年（一六四一）	・京都　柳の馬場遊里移転。島原遊郭の始め。			
寛永十九年	そゞろ物語	大一冊	江	
寛永末年	あつま物がたり	半一冊	江	
正保年間	秘伝書	中一冊	京	
承応二年（一六五三）	左縄		京	
明暦元年（一六五五）	こそぐり草	横二冊	京	
明暦二年	さんげ物語			
	桃源集	大一冊	京	
	難波物語	中一冊	京	
	ね物がたり	半一冊	京	
	まさぐりぐさ	大一冊	京	
	美也古物語	中一冊	京	
	桃源集追加	中二冊？	京	
明暦三年	・江戸　明暦の大火。元吉原消失。			
万治三年（一六六〇）	高屏風くだ物がたり	中二冊	京・大	
	吉原かゞみ	中二冊	江	
寛文元年（一六六一）	高尾物語			
	吉原用文章	中一冊	江	
寛文二年	をかし男	半二冊	大	
	吉原伊勢物語	半二冊	江	
寛文三年	空直なし	中二冊	京	
寛文四年	讃嘲記時之太鼓	半一冊	江	
寛文五年	吉原大全新鑑	中一冊	江	
寛文六年	吉原根元記	中一冊	江	
	吉原袖かゝみ		江	
寛文七年	吉原すゞめ	中二冊	江	
	遊女録		江	
	吉原花の露		江	
	吉原よぶこ鳥	半一冊	江	
	よし原六方	小一冊	江	
	吉原こまざらい	半一冊	江	
	吉原かい合		江	
	吉原しもしも草		江	
	吉原玉手箱		江	
	吉原心がく抄		江	
	吉原難波草		江	
寛文八年以前	このてがしは		江	
	高尾落し文		江	
	吉原太夫かせん		江	
	吉原つれづれ草		江	
	あざけり草		江	
	女秘伝		江	
	恋の文尽			
寛文十年？是頃	吉原袖かゞみ	大一冊	京	
	遊女の大がい		江	
	品がわりよし原新評判記		江	
寛文十一年	ぬれぼとけ	大三冊	江	
寛文十二年	吉原丸裸	半一冊	江	
	・大坂　島原の扇屋四郎兵衛、大坂新町へ移る。			
	※大坂新町遊郭の始め。			
延宝二年（一六七四）是歳以前	吉原しつゝい	半二冊	江	
	嶌原太夫手跡文章もんづくし	大一冊	京	
	好金集			
	奴問答			

	秘伝集		江
	なぞなぞ		江
	題林抄		江
	柴垣集		江
	江戸物語		江
	白露ほどの恋草	中一冊	江
延宝三年	吉原局惣鑑	中一冊	江
	吉原大ざつしよ	中一冊	江
是頃	山茶やぶれ笠	中一冊	江
	よしはらつぼねてうつがひ		江
	古きつね		江
	吉原黒白		江
	百物がたり		江
	さん茶時花集		江
	あすか川		江
	万年暦		江
	吉原しづめ石		江
	吉原荒木船		江
	吉原うき世のさが		江
	たきつけ	横一冊	京
延宝五年	もえぐゐ	横一冊	京
（一六七七）	けしずみ	横一冊	京
	きのふの夢	写一冊	江
	芥子鹿子	半一冊	江
	いなかものとはずかたり		江
延宝六年以前	無用草・山鳥物語・寝覚床・小手巻		
	麻姑の手・はらすぢ・ゑのこ草・白鳥・なたて草		大
延宝六年以前	瓢箪町の記		大
（一六七八）	朧夜の友		大

	鼬鼠論		京・大
延宝六年	四二物語	大一冊	京
	山茶よし垣		江
	吉原恋の道引		江
	色道大鏡	写十六冊	諸
延宝七年	嶋原評判やりくり草	半二冊	京
延宝八年	さん茶評判胡椒頭巾	中一冊	江
	吉原三茶本草名寄	一舗	江
	らいでん		江
	色道諸分なには鉦	大六冊	大
	色道古銀買難波鉦返答	半二冊	大
	吉原歌仙（仮題）	小一冊	江
	山茶徒坊評判	中一冊	江
	吉原人たばね	中一冊	江
	てうつがい		江
	大てんぐ		江
天和元年	嶋原評判雀遠目鏡	半二冊	京
（一六八一）	おもはく歌合	半一冊	京
	吉原三茶三幅一対	中一冊	江
	伽羅包	小二冊	江
	吉原あくた川	中一冊	江
	吉原下職原	中一冊	江
	嶋原紋日雀諸分鑑	半二冊	京
	大坂新町古今若女郎衆序	半一冊	大
	雀遠目鏡跡追	半二冊	京
	さんちゃうたゝね		江
	太夫つなぎ馬		
	女郎むかふかゞみ		
	けんどんへつひりむし		
元和元年			

（一六八一）	よしはら高ばなし		江
	懐鑑		大
天和二年	恋慕水鑑	半五冊	京・大・江
	吉原買もの調	中一冊	江
	小夜清水		
	浅草川土取舟		
天和三年	吉原大豆俵評判	中一冊	江
	島原大和こよみ	半四冊	京
	吉原鏡ヶ池	中一冊	江
	つぼね開山記		
	さん茶たいないさがし		
	局総まくり		
	吉原ふせ石		江
	都鳥昔話		
	山郭公		
貞享元年	好色女郎花	半三冊？	
（一六八四）	太夫前巾着		
	遊女割竹集		
	内證論		
	嶋原懐草		京
	後の白鳥		
	松梅鹿懐案内		
貞享二年	しらやき草	一冊	
是歳以前	島原袖かゞみ	二冊	京
	茶屋友りんき	四冊	
	祇園丸はだか	四冊	
貞享三年	吉原酒てんどうじ	小本二冊	江
	だいばぼん		
	なわしろ水		
	大ひでり		
	小さかづき		
	女郎草		
	朱雀信夫摺	半二冊	京
貞享四年	吉原源氏五十四君	写大一冊	江
	山茶東雲	中一冊	江
	色里夢想鏡		大
	栄花物語		
貞享五年	諸国色里案内	小三冊？	諸
	胸の焼つけ		